2022年10月30日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

神は私たちの避け所

［ネヘミヤ記2章1～10節］

アルタクセルクセス王の第二十年、ニサンの月のことであった。王はぶどう酒を前にし、わたしがぶどう酒を取って、王に差し上げていた。わたしは王の前で暗い表情をすることはなかったが、王はわたしに尋ねた。「暗い表情をしているが、どうかしたのか。病気ではあるまい。何か心に悩みがあるにちがいない。」わたしは非常に恐縮して、王に答えた。「王がとこしえに生き長らえられますように。わたしがどうして暗い表情をせずにおれましょう。先祖の墓のある町が荒廃し、城門は火で焼かれたままなのです。」すると王は、「何を望んでいるのか」と言った。わたしは天にいます神に祈って、王に答えた。「もしも僕がお心に適い、王にお差し支えがなければ、わたしをユダに、先祖の墓のある町にお遣わしください。町を再建したいのでございます。」王は傍らに座っている王妃と共に、「旅にはどれほどの時を要するのか。いつ帰れるのか」と尋ねた。わたしの派遣について王が好意的であったので、どれほどの期間が必要なのかを説明し、更に、わたしは王に言った。「もしもお心に適いますなら、わたしがユダに行き着くまで、わたしを通過させるようにと、ユーフラテス西方の長官たちにあてた書状をいただきとうございます。また、神殿のある都の城門に梁を置くために、町を取り巻く城壁のためとわたしが入る家のために木材をわたしに与えるように、と王の森林管理者アサフにあてた書状もいただきとうございます。」神の御手がわたしを守ってくださったので、王はわたしの願いをかなえてくれた。こうして、わたしはユーフラテス西方の長官のもとに到着する度に、王の書状を差し出すことができた。王はまた将校と騎兵をわたしと共に派遣してくれた。ホロニ人サンバラトとアンモン人の僕トビヤは、イスラエルの人々のためになることをしようとする人が遣わされて来たと聞いて、非常に機嫌を損ねた。

 [１] エズラとネヘミヤ

明日は10月31日で、いわゆる宗教改革記念日です。マルチン・ルターたちの改革によってプロテスタント教会が誕生するきっかけになった訳ですが、そのルターが作詞・作曲し、民衆も共に歌った讃美歌が先ほどこの礼拝の中でも歌った「神は我がやぐら」です。元のドイツ語では「やぐら」は、「ブルグ（城）」ですね。ちょっと勇ましい感じもしますけれど、今日交読した詩編46編を基にした慰め深い讃美歌です。個人的なことですが、これは私の葬儀の時には是非歌ってほしい！と思っている讃美歌の一つです。この詩編46編は、神様ご自身が私にとって、堅固な城のようにかくまってくれる存在なんだ、私たちはそこに避け所を見出すことが出来る、と言っていますよね。―「神はわたしたちの避けどころ、わたしたちの砦、苦難のとき、必ずそこにいまして助けてくださる」と。

　今日は、旧約聖書の「ネヘミヤ記」を読んで頂きました。これは「エズラ」「ネヘミヤ」と一緒になって言われることが多い聖書の歴史書ですが、あの国家的苦難であった「バビロン捕囚」後に、自分たちの故郷に戻り、崩れてしまったエルサレム神殿と城壁を再建する、という記述になっています。

エズラという人は、あのアロンの系譜に繋がる祭司であり、このネヘミヤ記の8章の所で城壁完成後、モーセの律法の書を皆が集まっている所で朗読し、それに対して皆が「アーメン、アーメン」と唱和し、ひざまずきながら、主を礼拝したと、ここでユダヤの共同体は神様の約束に立つ共同体として再出発した、という記事が記されています。一方、ネヘミヤの方は、祭司ではありませんが、異国のペルシアの都スサで、王に仕える献酌官であったと書いてあります（1章最後）。宦官の様な立場で大きな信頼を得ていました。その彼が、遠く祖国の現状を聞くに及んで、居てもたってもいられなくなり、エルサレムの町を、神殿の城壁再建をしたいと王に申し出て、それが許される訳です。それが今日の2章の前半にある訳ですけれども、恐らく実際の年代としては、まずネヘミヤの城壁再建、その後、神殿そのものの再建というエズラの話につながるのではないかと言われています。いずれにしても、エズラとネヘミヤの活躍は重なっているようです。

[2] 「神殿」って何？

ここで作られようとしている神殿は「第二神殿」です。第一神殿はソロモンによるもの、そしてバビロン捕囚後の第二神殿、そしてその後大分時が経ちますが、あのヘロデ王による第三神殿（これはかなり煌びやかなものだったようです）が建っていました。それも、イエス様が「この目の前に見える神殿も崩れる時が来る」と言われた通りに、ローマ帝国とのよっ戦いて崩され、現在はありません。今エルサレムに行くと、昔神殿があった場所にはイスラム教の「岩のドーム」（礼拝所）が建っていまして、わずかに、かつての城壁の西側の部分が残っていて、そこが有名な「嘆きの壁」と呼ばれる場所です。幅60メートルほど、高さは19メートルあるそうです。ですから、今ユダヤ教も、もちろんキリスト教もいわゆる「神殿」は持っていません。シナゴグや教会はもちろんありますが、それは神殿ではありません。そもそも、この「神殿」とは何だったのでしょうか？

良く誤解されるのは「神様の住まい」という考え方ですが、ギリシア神話だったらそれでよいかも知れませんが、神様は、住まい・住居を必要とされることはありません。一番初め、列王記上8章に自分が建てた神殿を見ながらソロモンはこう言っています。「神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。 天も、天の天もあなたをお納めすることができません。 わたしが建てたこの神殿など、なおふさわしくありません。」 これはとても大事な点だと思いました。神様は私たちに住まいを作ってもらわなければならないほどちっぽけな方ではないですよね。じゃあ、この当時「神殿」って何だったのだろう。ネヘミヤやエズラはどうしても神殿や城壁を再建したかった。そのことがネヘミヤ記の1章に示されていると思います。このようにあります。1:2以下。―「兄弟の一人ハナニが幾人かの人と連れ立ってユダから来たので、わたしは捕囚を免れて残っているユダの人々について、またエルサレムについて彼らに尋ねた。彼らはこう答えた。「捕囚の生き残りで、この州に残っている人々は、大きな不幸の中にあって、恥辱を受けています。エルサレムの城壁は打ち破られ、城門は焼け落ちたままです。」これを聞いて、わたしは座り込んで泣き、幾日も嘆き、食を断ち、天にいます神に祈りをささげた。わたしはこう祈った。「おお、天にいます神、主よ、偉大にして畏るべき神よ、主を愛し、主の戒めを守る者に対しては、契約を守り、慈しみを注いでくださる神よ。耳を傾け、目を開き、あなたの僕の祈りをお聞きください。あなたの僕であるイスラエルの人々のために、今わたしは昼も夜も祈り、イスラエルの人々の罪を告白します。わたしたちはあなたに罪を犯しました。わたしも、わたしの父の家も罪を犯しました。…どうか、あなたの僕モーセにこう戒められたことを思い起こしてください。『もしも背くならば、お前たちを諸国の民の中に散らす。もしもわたしに立ち帰り、わたしの戒めを守り、それを行うならば、天の果てまで追いやられている者があろうとも、わたしは彼らを集め、わたしの名を住まわせるために選んだ場所に連れて来る。』」…そして、2章になると、ネヘミヤは、自分が仕える王に「町の再建をさせて下さい」というようなことを申し出る訳です。2:5です。―「王に答えた。「もしも僕がお心に適い、王にお差し支えがなければ、わたしをユダに、先祖の墓のある町にお遣わしください。町を再建したいのでございます。」

今、ネヘミヤはペルシアで安泰な守られた生活をしているのです。しかし彼はこの後都合12年間ユダヤで城壁再建に取り組むのです。来週見ますが、妨害も入ってなかなか大変でした。それでも彼はそれをやった。彼にとって神殿とは、神の愛の場所であったと思います。それがあることで、異国の地にあっても耐えることが出来た。私にはまことの神様がいるのだ！と、落ち込む時も奮い立つことが出来た。「神殿」、それはある意味、人生の避け所だったのだと思います。それがあることによって、支えられていたのです。まだイエス様がお出でになる何百年も前の事です。「神殿」とは「インマヌエル」、神共にいます、という約束が形になっているそういう場所なのだと思います。それが崩された。自分たちの罪の故、自己中心やおごりの故に。ですから、「主よ、私も罪を犯しました」と、悔い改めの中で、再出発しようとしているのです。今行かなければ、「城壁を築き直さなければ」自分が自分でなくなると、そのように促されるものがあったのではないでしょうか。

[3] 生活の中で「神殿」を見出して行こう

あぁ、自分はどうなのだろう、と思います。このような悔い改めの思いで礼拝を捧げているだろうか。むしろ、自分が何か神様に奉仕してあげているみたいなおごりがあるとすればそれは神様、砕かれるでしょう。‟私が”神様に何かをすることじゃないのです！断じてそうではありません。神様は、当時「神殿」という形で、私たち人間をすっぽり包む「避け所」を用意して下さったのだと思います。そしてそれは、今の私たちにとっては、まことの神殿であるイエス・キリストです。神様は「ここに来い」と言うのではなくて、人間を愛して神様ご自身が私たちと同じ人間になって下さったのです！ここで、神様と人とは切り離すことは出来ない。私たちがどんな存在であろうが、神様の愛は変わらないのです！あなたは神と共にます、と宣言して下さっているのです。

私たちは、「人生の避け所」が本当に必要だと思います。「そんなの弱い人間のやることだ」？弱くていいじゃないですか!?強がって神様に背を向けて深い孤独に陥るのではなくて、神様が用意しして下さる温かい御手に引かれながら、その交わりを与えられながら生きて行く方が良いです。「神殿」とは、神様と人間が対話す所、交わる所です。それを、私たちの生活の中でも作って行きましょうよ。悔いし砕けし心を持って礼拝を捧げることもそうですし、静まる時間を確保することも大事だなあと思いますし、また、個人的に、本当に祈る時間を大事にしてゆきたいと思います。それが「城壁を築き直す」ということかも知れませんね。

　今年もあと二ヶ月でクリスマスがやって参ります。主を待ち望みながら、与えられている生活の中で、「神殿」を見出して行きましょう。

お祈り致します。